

# 教宣 せぶん

共同総行動 断面図

## ふたつの顔を持つ経営

「そもそも企業会計なるものは、経営者が自らの都合の良いようにどうにでもつくりあげることができる会計システムだ。その証拠に、契約係社員のみなさんは、日勤社では良質な資産の形成に立派に貢献してきたではありませんか。新会社になった途端、会社は大きな赤字が出るという説明をしているが、ではなぜ日勤社では赤字が生まれなかったのか。なぜ会社の資産の形成に貢献できたのか?」。9時30分からの意思統一集会で語られた松井議長の言葉です。私たちが「おかしい」と思う疑問は、心ある人は誰もが感じてくれているようです。

「企業内で不当労働行為や不当配転が繰り返され、国民が誰でも受けられる裁判に訴えるため、証拠を提出したところ、その証拠が個人情報保護法に違反したとして解雇された。本来、顧客を保護するためにできたはずの個人情報保護法を、経営が悪用して従業員を解雇するために使った。こんなことがまかり通ったら、法治国家の名折れだし、この経営は『法』を挑発していると思えない」。日産センチュリー社前で行なわれた抗議行動での要請団の言葉です。この経営者のふるまいは、まさに法の本質・趣旨を大きく逸脱した行為ですし、「狂気の沙汰」としか思えません。こういう感覚を持つ企業経営者が金融機関の役員の椅子に座っていて良いのでしょうか?

「交渉で会社は『不服があるなら裁判でもなんでも起こせば良いじゃないか』と開き直っている。都労委や中労委から『謝罪文の掲載や真摯な労意交渉を開きなさい』と、再三命令を出されているにもかかわらず、謝罪文を組合側に開示しようとしないうし、まじめな労使交渉は未だに開かれていない。外国ではどうか知らないが、日本に来て、日本で事業を営み、日本で利益を上げている以上、日本のルールや命令は守ってもらわなければならない」。AIGスター生命前の抗議行動で、連帯の挨拶に立った全損保吉田委員長の本音です。非正規社員を虐げる、外国資本の姿が浮かび上がりました。

それぞれの企業で「資本の横暴」が見て取れます。それぞれの企業では、同じように「コンプライアンス」が叫ばれているはずですが、これらの企業の経営者は「法には守らなければならない法と守らなくてもよい法がある」と思っているようです。顧客や株主、「世間一般」に見せる顔と、企業内で働くものに見せる顔を、自らの都合の良いように使い分けているようです。経営者の本当の顔・裏の顔を知る私たちは、事実を世間に知らしめることで、経営者の顔を表裏一体に近づけていきましょう。どちらの顔を採用するかは、まさに経営判断です。